

補足資料

1. 神殿崩壊の預言 (マタイ 24 : 1~2)

- (1) 神殿拡張工事 紀元前 20 年へロデ大王が着工、前 4 年へロデ大王死去・工事続行
- (2) ヨハネ 2 : 20 紀元 27 年の春・過越の祭、「神殿着工から 46 年」
- (3) マタイ 24 : 1 紀元 30 年の春・過越の祭
- (4) 紀元 64 年、神殿拡張工事の完成
- (5) 紀元 66 年、ローマに対する第一次戦役勃発
- (6) 紀元 70 年、エルサレム陥落・神殿炎上崩壊
 - ① ローマ軍の指揮官ティトゥスは、神殿を破壊しないように命令
 - ② しかし、ある兵士がたいまつを神殿に投げ込み、内部が焼失した。
 - ③ 内壁を覆っていた金が溶けて、石と石の間に流れ込んだ。
 - ④ 金を取り出すために、神殿の石はすべて崩された。

2. 弟子たちの質問 (マタイ 24 : 2~3)

- (1) 【Q-1】エルサレムの神殿崩壊はいつ起こるのか。
- (2) 【Q-2】イエスの再臨の時には、どのような前兆があるのか。
- (3) 【Q-3】この世の終わりには、どのような前兆があるのか。

3. イエスの回答 【A-3】この世の終わりの前兆 (マタイ 24 : 4~8)

- (1) 終わりの前兆ではないことが二つある (4~6 節)
 - ① 偽キリストの出現 (紀元 131~135 年のシモン・バル・コクバなど)
 - ② 戦争のことや、戦争のうわさ (地域戦争)
- (2) 終わりの前兆 (7~8 節)
 - ① 「民族は民族に、国は国に敵対して」=世界的規模での戦争

<ul style="list-style-type: none"> ● 第 1 次世界大戦 1914~1918 年 ● 第 2 次世界大戦 1939~1945 年 	}	実質的に一つの世界大戦
--	---	-------------
 - ② 飢饉
 - 1920 年 中国
 - 1921 年 ソ連 (ロシア)
 - ③ 地震 (大地震、死者 1 万人以上を目安に挙げると)
 - 紀元 63 年から 1896 年 26 回
 - 1900 年以降、頻発。
 - 1905 年インド (1 万 9 千)、1906 年チリ (2 万)、1908 年イタリア (7~10 万)、1915 年イタリア (3 万)、1917 年インドネシア (1 万 5 千)、1918 年中国 (1 万)、1920 年中国 (20 万)、1923 年日本 (14 万 3 千)

- 1927年中国(20万)、1932年中国(7万)、1933年中国(1万)、1934年インド(1万)、1935年パキスタン(3~6万)、1939年チリ(2万8千)、トルコ(3万)
 - 1948年ロシア(11万)、1960年モロッコ(1万~1万5千)、1962年イラン(1万2千)、1968年イラン(1万2千~2万)、1970年中国(1万)、ペルー(6万6千)、1974年中国(2万)、1975年中国(1万)、1976年グアテマラ(2万3千)、中国(25万5千)、フィリピン(8千)、1978年イラン(1万5千)、1988年ロシアとトルコの国境付近(2万5千)、1990年イラン(4~5万)、1999年トルコ(1万5千)
 - 大地震の頻度は世紀ごとに高まっている。
 - イエスの公生涯のあと、1000年間では、記録された大地震は5回。世紀が進むと、大地震の頻度は高まってきた。
 - ◇ 14世紀では、157回
 - ◇ 15世紀では、174回
 - ◇ 16世紀では、253回
 - ◇ 17世紀では、278回
 - ◇ 18世紀では、640回
 - ◇ 19世紀では、2119回
 - 20世紀では、小さな地震まで含めると90万回。1時間ごとに地上のどこかで地震が起きていることになる。
 - ④ 疫病、恐ろしいこと、天からのすさまじい前兆(ルカ21:11)
- (3) 「産みの苦しみの初め」
- ① 産みの苦しみ=今の世が終わり、新しい世になるための陣痛
 - ② メシアの王国が来る前の苦しみを「陣痛」と呼ぶのはラビ的用語
 - ③ 産みの苦しみ、陣痛そのものは大患難期。その前兆を「産みの苦しみの初め」と表現

4. イエスの回答【A-1】エルサレムの神殿崩壊

(1) 何よりも前に起こること、それは使徒たちへの迫害(ルカ21:12~19)

- ① 12節「これらのすべてのことの前に」=この世の終わりとかいう前に、今から間もなく起こること。使徒たちは、迫害に会う(ユダヤ人共同体からと、異邦人の支配者たちから)
- ② 13~15節 迫害は、証しする機会となる。迫害によって散らされて宣教拡大。使徒たちは、事前に証しする内容を準備する必要はない。聖霊によって与えられる。彼らの証しに反論できる者はいない。(「使徒の働き」の記事)
- ③ 16~17節 使徒たちの家族関係が破壊される。家族に裏切られる者も出る。

殉教の死を遂げる者も出る（11人の使徒のうち、10人が殉教）。福音のために、隣人から憎まれる。

- ④ 18～19節 復活の栄光の体は、保証されている。迫害者によって奪われることはない。信仰による忍耐を示すことで、靈的に救われていることが証明される（忍耐によって救いを得るのではない）。
 - ⑤ エルサレムの神殿が崩壊する前に、多くの使徒たちが殉教死することを示唆している。
- (2) 使徒たちへの迫害の次に、エルサレムとその神殿が崩壊する（ルカ 21：20～24）
- ① 20節 エルサレムが軍隊に囲まれたら、滅亡が近い
 - 紀元 66 年、戦役勃発。シリア属州の総督が率いる軍団がエルサレムを包囲し攻撃するも、補給が十分でないと判断し撤退。撤退中にユダヤ人たちに襲撃されてローマ軍は大損害を受けた。
 - 紀元 67 年、皇帝ネロは、ヴェスパシアヌスに 3 個軍団を率いさせてユダヤに派遣。68 年エルサレム包囲。
 - 6 月に、ガリヤ属州総督の反乱などにより、皇帝ネロが自殺に追い込まれる。ヴェスパシアヌスは、いったん包囲を解いてエジプトにて待機。
 - 69 年 12 月に、ヴェスパシアヌスが皇帝になり、戦役再開。指揮官は息子のティトゥス。
 - 70 年春、エルサレム包囲。第 9 月（現在の 7～8 月）に陥落。
 - ② 21節 山へ逃げよ
 - 紀元 66 年の最初の包囲を見て、約 2 万人のユダヤ人信者たちが、エルサレムから逃れた。
 - それ以外の地から約 8 万人のユダヤ人信者たちが合流し、ヨルダン川を東に渡った山地にあるペラという町に避難した。
 - ③ 23節 この地（エルサレム）に大きな苦難が臨み、この民に御怒りが臨む
 - この戦役でのユダヤ人の死者は 110 万人
 - イエスをメシアとして信じた信者たちの中からは一人も死者が出なかった。
 - ④ 24節 異邦人の時の終わるまで
 - 異邦人がエルサレムを支配している期間を指す。
 - ソロモンの神殿がバビロニアによって破壊された時から始まる（前 586 年）。
 - この日から、ダビデの子孫がエルサレムで王位に就くことがなくなる。
 - メシアが再臨して王となる時が、異邦人の時の終わりである。
 - 注意：「異邦人の完成のなる時」（ロマ 11：25～26）＝教会に属する異邦人の数が満ちる時。携挙の時を指している。

5. イエスの回答【A-2】再臨の前兆

(1) 大患難期前半に起きる事 (マタイ 24 : 9~14) イスラエル民族を中心として

① 迫害の勃発 (9~10 節)

- 「そのとき」→正確には「それから」、9 節から大患難期の記述に入る。
- 聖徒たちに対する迫害が起こり、多くの者が殉教の死を遂げる。
- 世界の諸国が、聖徒たちを迫害する。
- 多くの者が、迫害を逃れようとして信仰から離れる。
- 人々が互いに相手を密告し、憎み合う。

② 偽預言者たちの出現 (11 節)

- 偽キリストではない。偽預言者=神のことばを代弁すると主張する者。
- 偽預言者は、神の民イスラエルを欺こうとする。これに対して、教会を欺こうとするのは偽教師 (Ⅱペテロ 2 : 1)
- 偽預言者の預言は、成就しない。

③ 罪の増加 (12 節)

④ 大患難期を生き延びるユダヤ人たち (13 節)・・・後半期にも関係する

- 大患難期 7 年間を生き延びたユダヤ人たちは、全員が救いを受ける。これは、ひとりのひとりの信仰による救いであるが、ひとりの例外もなく全員が信じて救われるという意味で、民族的救いである。
- 生き延びたから救われるというわけではない。救いは恵みにより信仰を通して受ける。この原則は、いつの時代も同じ。
- 信仰の内容は、「福音の三要素」。
- 彼らを信仰に導くのは、前半 3 年半での世界的な宣教活動。エルサレムにおいて二人の証人、全世界において 14 万 4 千人のユダヤ人宣教師たち (黙 7 : 4)。

⑤ 世界宣教 (14 節)

- 大患難期前半の 3 年半の間に、世界宣教が行われる。
- 世界宣教で救われる人たちが多く出るから、迫害も起こる。

(2) 大患難期後半に起きる事 (マタイ 24 : 15~28)

① 「荒らす憎むべきもの」の出現 (15 節)

- 荒らす憎むべきものの出現が、大患難期の後半に入るしるし
- この意味を知るためには、ダニエル書の預言から学ぶ必要がある。
- ダニエル 9 : 27
 - 反キリストは、イスラエルと 7 年間の契約 (条約) を結ぶ。
 - 3 年半が経った時点で、彼は条約を破棄する。
 - 神殿での祭儀を止めさせる。
 - 反キリストは、神殿の至聖所に座り、自らを神だと宣言する。

- 反キリストの像が神殿に（おそらく、人々の目につくように、神殿の中ではなく、神殿の玄関の前に）置かれ、それを拝まない者は殺される（黙 13 : 14~15）。
 - しかし、反キリストは最後に滅ぼされる。
 - 15 節の「荒らす憎むべきもの」とは、大患難期 7 年のちょうど半分、3 年半経過したときに、神殿に設置される反キリストの像である。
- ② 山への逃避（16~21 節）
- 山とは、ヨルダン川東側の山地
 - ユダヤ人たち（イスラエルの民）は大急ぎで逃げる。持ち物に固執して時間を無駄にしてはならない。
 - 雨季にあたる冬や、移動手段が止まる安息日に逃げるのは困難。
 - 後にも先にもこのような苦難はこれまでにない。
- ③ 限定された日数（22 節）
- 苦難の時間がいつまでも続くのではない。神が限定しておられる。
 - その期間は、ダニ 9 : 27 によれば、半週（3 年半）= 1260 日
 - ダニ 12 : 11~12 によれば、メシア王国が設立されるまでは、1335 日。よって、大患難期が終わって 75 日が、移行準備期間。
- ④ 偽キリストと偽預言者の出現（23~26 節）
- キリストが密かに再臨されたという噂を信じてはならない。
 - 偽キリストや偽預言者たちに惑わされてはならない。彼らの方法は、大きなしるしや不思議である。よって、しるしや不思議は、必ずしも神からのものとは言えない。
 - イスラエルの民は、避難している山地から飛び出して行ってはならない。
- ⑤ 再臨の状況（27 節）と再臨の場所（28 節）
- メシアの再臨は、誰もが認識できる形で起きる。「いなずまが東から出て、西にひらめくように」。突然、しかし誰も見逃すことのないような形で起きる。
 - 再臨の前に、イスラエルの民が避難している山地に反キリストの軍勢が迫る。
 - 「死体」とは、山地に隠れているイスラエルの民。絶体絶命の状態。
 - 「はげたか」とは、反キリストが指揮する諸国民の連合軍
 - その場所は、ボツラ（現在のヨルダンにあるペトラ）
 - ミカ 2 : 12~13 「おりの中の羊」→「ボツラの羊」
 - イザヤ 34 : 5~6
 - イザヤ 63 : 1~2
 - 再臨のイエスに付き従うのは、天の軍勢（複数形）（黙 19 : 14）。天使の

軍勢（マタ 16：27）と教会の信者たちの軍勢（ユダ 14～15）である。

- 再臨のイエスは、反キリスト軍と「ひとりで」戦う（イザヤ 63：3）。天使も教会の信者たちも、そして地上の諸国民のうちの信者たちの軍勢も、反キリスト軍との戦いには参加しない。再臨のイエスのみが戦い、イエスの衣は血に赤く染まる（イザヤ 63：2、黙 19：13）
- 戦いはボツラから始まり、後退する反キリスト軍を追って、エルサレムまで続く。最終的には反キリスト軍はエルサレムの郊外で壊滅し、イエスはエルサレムの東の山、オリーブ山の上に立つ（ゼカリヤ 14：4）。
- 再臨の場所は、エルサレムではなく、ボツラである。

(3) 再臨（マタイ 24：29～30）

① 再臨のしるし（29～30節）

- 大患難期には数回の暗黒がある。この暗黒は、大患難時代の末期、メシアの再臨の直前に起こる暗黒である。
- 太陽、月が光を放たなくなる。「星は天から落ち」は、星も光を放たなくなるという意味であろう。
- 海が荒れるので、人々は恐怖に襲われる（ルカ 21：25～26）
- 30節の「人の子のしるし」とは、神の栄光、シャカイナ・グローリーである。「人の子」はメシアの呼称のひとつ（ダニ 7：13～14）
- 暗やみから一転して光が満ち、イエス・キリストが地上に再臨する。

② 地上のすべての国民が、再臨を目撃する。信者でない人々にとっては悲しみの時。

(4) イスラエル民族の帰還（マタイ 24：31、マルコ 13：27）

- ① イスラエル民族は、約束の地に集められる。75日間の移行準備期間中。
- ② 「地の果てから」＝大患難期を生き延びたユダヤ人たち。ボツラに避難した民が大半であろうが、大患難期の中に迫害のために世界各地に散らされたユダヤ人たちも。
- ③ 「天の果てから」＝旧約時代の聖徒たち
- ④ 生きているユダヤ人と復活したユダヤ人が、ともにメシアの王国に住む。

(5) いちじくの木のとえ（マタイ 24：32～35）

- ① いちじくの木は、この文脈ではイスラエルのことではない。ルカ 21：29では「いちじくの木や、すべての木を見なさい」とある。葉が出てくると、夏が近いのがわかる。
- ② それと同様に、「これらのことのすべてを見たら」、マタイ 24：4～28の内容＝7年間の大患難期、とくに「荒らす憎むべきもの」がエルサレムの神殿に立つのを見たら、再臨までは3年半である。
- ③ この世代（不信仰のイスラエル）が死んで、レムナントだけが残る（34節）

6. 携挙に関する教え（マタイ 24：36～42）

- (1) 「ただし」は、ギリシヤ語で「ペリ・デ」、話題を変えるとき言葉。
 - ① ここから別のテーマに移る。携挙について。
 - ② 携挙が大患難期の後に起こることではない。イエスは、出来事を時間順に教えているのではない。
- (2) この教えの重要ポイントは、携挙の時は誰も知らないが、再臨の時は分かるということ。いちじくの木のとたとえとの関連で語られている。
- (3) 37 節の「人の子が来る」というのは、携挙においてイエスが空中まで信者を迎えに来ることを指す。
- (4) 携挙は、人々が何の疑いもなく日常生活を送っている時にやって来る。再臨が大患難期の最後にやって来るのとは大きく異なる。
- (5) 携挙の特徴は、信者と不信者との分離。信者は天に挙げられ、不信者は地上に残される。地上に残された者は、大患難期を経験する。
- (6) 「目を覚ましていなさい」（42 節）とは、教会時代の信者に対する勧めである。
- (7) 大患難期を逃れる道（ルカ 21：35～36）
 - ① 「その日」＝大患難期
 - ② 地上のすべての人はそれを経験する。人類の不信仰に対する裁き
 - ③ 救いを得た者は、携挙されて人の子の前に立つことができるので、大患難期を経験しない。
 - ④ 救いは、神の恵みにより、信仰を通して受ける。信仰の内容は「福音の三要素」である。

7. 再臨に関係する 5 つのたとえ話（マルコ 13：33～37、マタイ 24：43～25：46）

(1) 5 つのたとえ話

- ① 主人の帰りを待つ門番（マルコ 13：33～37）
- ② 泥棒に備える家の主人（マタイ 24：43～44）
 - 44 節の「あなたがた」は、大患難期の信者たちを指す
- ③ 忠実なしもべと悪いしもべ（マタイ 24：45～51）
- ④ 花婿を出迎える 10 人の娘たち（マタイ 25：1～13）
 - 花婿はイエス・キリスト、花嫁は携挙された教会
 - 花婿が花嫁を伴って帰って来るのは、再臨のとき
 - 油を用意している娘たちは、教会の携挙の後、大患難期において救われた信者たち。油が象徴的に用いられるときは、聖霊を指す。「油を入れて持っていた」とは、信仰を通して救われて聖霊を受けているということ。
 - イエスの再臨のとき、イスラエル民族は全員が救われているので、「賢い娘たち＝信者たち」と「愚かな娘たち＝不信者たち」との区分される対

象ではない。よって、このたとえ話の対象となっているのは、大患難期の諸国民（異邦人）である。

- 賢い娘たち=信者たちは、マタ 25 : 10 にあるように、婚礼の祝宴、すなわち、メシアの再臨の後に催される「小羊の婚宴」（黙 19 : 9）に招かれる。そして、メシアの王国の住民となる。

⑤ タラント（マタイ 25 : 14~30）

(2) 大患難期の諸国民たちにとって、再臨の時がわからない、ということについて

- ① マタ 25 : 32~35 の「いちじくの木のとえ」では、再臨がいつ起きるのか、わかる。それは反キリストの像がエルサレムの神殿に立ってから 3 年半である、と教えられた。

- ② それに対して、5 つのたとえ話では再臨の時期は「わからない」とあるのは、なぜか？ 再臨の日はあらまし予想できるが、何時かまではわからない。

- マルコ 13 : 35 「夕方か、夜中か、鶏のなくころか、明け方か、わからないからです。」
- マタイ 24 : 43 「どろぼうが夜の何時に来ると知っていたら」
- マタイ 24 : 50 「思いがけない日の思わぬ時間に」
- マタイ 25 : 13 「あなたがたは、その日、その時を知らないからです」

(3) 5 つのたとえ話の結論部分=異邦人の裁き（マタイ 25 : 31~46、ヨエル 3 : 1~3）

① ヨエル 3 : 1~3

- 再臨の後、異邦人が裁かれることについての預言
- 裁きが行われる場所は、ヨシヤパテの谷
- 裁きの基準は、ユダヤ人をどのように扱ったか

- ② 再臨したメシアの前に、すべての国々の民が集められる。彼らは、大患難期を生き延びた異邦人たち。

- ③ 羊と山羊のより分けが行われる。羊は、ユダヤ人たちに愛を示した人々。イエスは、ユダヤ人のことを「わたしの兄弟たち」と言っている。

- ④ 羊の異邦人たちには、王（主イエス）に良いことをしたとという認識はない。しかし、ユダヤ人にしたことは、主イエスにしたことなのである。

- ⑤ 山羊は、反ユダヤの異邦人。彼らは、反キリストに従い、大患難期においてユダヤ人を苦しめた。彼らは、メシアの王国に入ることは許されず、死ぬ。最終的には、他の時代における不信仰の人々と共に、「大きな白い御座の裁き」（黙 20 : 11）を受けて、41 節「悪魔とその使いたちのために用意された永遠の火」、すなわち「ゲヘナ」（マタ 10 : 28）とか「火の池」（黙 20 : 14）と呼ばれる所へ。

- ⑥ 大患難期においてユダヤ人たちに愛を示すことができるのは、信仰によって救われた人であることの証明である。

まとめ

1. 大患難期の前に起きること
 - (1) エルサレム神殿の崩壊（紀元 70 年）
 - (2) 携挙（紀元 70 年以降、いつでも起こり得る）
 - (3) この世の終わりの前兆（世界戦争・飢饉・地震・疫病・その他）
2. 大患難期
 - (1) 前半の 3 年半
 - (2) 後半の 3 年半
 - (3) 大患難期の末に、再臨
 - ① 直前に暗黒
 - ② シャカイナ・グローリー（神の栄光）とともにメシアが来る
3. 大患難期を生き延び、全員が救われたイスラエル民族が、約束の地に帰還する
4. 次の世＝メシアの王国・・・黙示録ではじめて、「千年」（黙 20：16）と啓示される
5. オリーブ山での教えは、あらゆる時代の人たちに対する適用を持っている。
 - (1) エルサレム神殿崩壊の前
 - ① 使徒たちへの迫害
 - ② エルサレムが軍隊に包囲されるのを見たときの対処
 - (2) エルサレム神殿崩壊の後
 - ① 偽キリストの出現
 - ② 地域戦争が頻発するが、まだ大患難期は来ない
 - ③ しかし、携挙はいつ起こるか分からない。目をさましていなさい。
 - (3) この世の終わりの前兆が起きる時代
 - ① 世界大戦が起きた、大きな地震が頻発する、飢饉や疫病が襲ってくるなら・・・
 - ② 大患難期が近い
 - (4) 大患難期
 - ① 前半と後半で何が起こるのか
 - 反キリストとイスラエルとの 7 年間の条約締結が、大患難期の始まり。
 - 反キリストは、3 年半で条約を破棄して、エルサレムを占領。
 - 後半は、反キリストが全世界を支配。
 - ② 特に後半では、イスラエル民族は山へ逃げよ。
 - ③ 再臨の前兆は・・・暗黒と神の栄光
 - ④ 異邦人は大患難期をどのように過ごすべきか・・・イエスを救い主として信じ、迫害されるユダヤ人たちを助ける。
 - 目を覚ましていること＝信仰によって救われた結果、霊的な目が開かれる

- 注意深く生きること＝信仰によって救われた結果、不法がはびこる中、聖霊に導かれて神のことばに従う選択をしていくことができる
 - 勤勉に主の業に励むこと＝信仰によって救われた結果、ユダヤ人たちを愛する。迫害されるユダヤ人たちを助ける機会があれば、危険をかえりみずに彼らに食べ物や飲み物、着る物を与える。これは信仰の表明である
- (5) 大患難期の異邦人に対して語られている5つのたとえ話について、現代の私たちにも適用すべき教えが含まれている。それは、目をさまし、勤勉に主のしもべとして労することである。
- ① 目を覚ましていること（携挙や再臨を待ち望む）
 - ② 注意深く生きること（正しい歴史観と人生観を持つ）
 - ③ 勤勉に主の業に励むこと（一人ひとりが与えられた賜物を用いて仕え合う）